

国語

「現代の国語, 言語文化」

現代の国語、言語文化

〔二〕 次の問い（問一～問六）に答えなさい。

問一 次の（1）・（2）の熟語や故事成語の説明としてもっとも適切なものを、それぞれ次の①～④の中から一つずつ選び、解答記入欄 ・ にマークしなさい。

（1） 意匠

- ① 工夫をめぐらすこと
- ② 高い志を持つこと
- ③ 人に尊敬されること
- ④ 見かけが派手なこと

（2） 胸襟を開く

- ① 勇気をもって人を救う様子
- ② 他人の意向を受け入れる様子
- ③ 思いを隠さず打ち明ける様子
- ④ 強い緊張から解放される様子

問二 次の四字熟語の空欄にあてはまるものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 にマークしなさい。

□古盛衰

- ① 懐
- ② 栄
- ③ 新
- ④ 誉

問題訂正

〔一〕 問二 問題文

誤：『 □古盛衰 』

正：『 □枯盛衰 』

現代の国語、言語文化

問三 次の語の言い換えとしてもつとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄
4 にマークしなさい。

絵空事

- ① ファジー
- ② ファイクション
- ③ シンボル
- ④ エピソード

問四 次の説明にあてはまるものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄
5 にマークしなさい。

欲望や興味が生じること

- ① 興が乗る
- ② 歓心を買う
- ③ 食指が動く
- ④ 耳目を集める

問五 対義語の組み合わせとしてもつとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄
6 にマークしなさい。

- ① 造化 — 自然
- ② 称賛 — 罵倒
- ③ 継起 — 続発
- ④ 懸念 — 危惧

現代の国語、言語文化

問六 次の(1)・(2)の語句の使い方としてもっとも適切なものを、それぞれ次の①～④の中から一つずつ選び、解答記入欄

7

 ・

8

 にマークしなさい。

(1) 致し方ない

- ① 申し訳ありません。致し方ないです。
- ② この決定はとも納得できる致し方ないものだ。
- ③ 致し方ないですが、喜んで同意します。
- ④ 残念ながら、現状では致し方ない。

(2) したり顔

- ① 彼は難しい大学に受かったことをしたり顔で話した。
- ② 彼は実験に失敗し、したり顔でかわいそうだった。
- ③ したり顔をしていた彼は、しみりと事情を語った。
- ④ 彼は皆に励まされて、やっとしたり顔になった。

現代の国語、言語文化

〔二〕次の問い(問一～問二)に答えなさい。

問一 次の問題文(1)～(3)について、文意に照らして正しいものを、それぞれ次の①～④の中から一つずつ選び、解答記入欄

9

 ～

11

 にマークしなさい。

(1) 国立天文台によると、銀河系の周りには小さな銀河「衛星銀河」が、従来の理論に基づく推定より多いことが分かった。この成果は、星や銀河の形成過程、銀河の形成に関与する暗黒物質の理解につながるという。

9

- ① 小銀河が予想以上にあるとすれば、銀河系のような大銀河も予想以上に存在する可能性がある。
- ② 従来の理論の欠陥がどこにあったか確認すれば、銀河の形成過程を解明していくことができる。
- ③ 銀河系の周囲にある小銀河が推定より多いという発見は、宇宙にある物質に関する知見をもたらす。
- ④ 天文学の発達は目覚ましく、従来の理論を覆す見解が示され、宇宙の謎が次々と解明されようとしている。

(2) 数学は土地の測量などの身近な問題を解決するために生まれた。だが数学は二乗するとマインラス1になる虚数という抽象的な概念も誕生させた。物理学の量子力学は虚数なしには成立しないし、宇宙研究も数学に支えられている。

10

- ① 数学が実目的から離れ抽象的なものとなった時、非現実的な領域を探る学問が成立した。
- ② 量子力学と宇宙研究という現代における最先端の学問が、数学という学問を進化させている。
- ③ 数学における虚数の概念の成立が量子力学を生み、量子力学により宇宙研究も可能になった。
- ④ 数学という学問が新しい概念を生み出し、現代の学問の発展に関して多大な貢献をしている。

(3) 六十三〜九十歳の被験者三十人に、VR（仮想現実）内である匂いを嗅ぎ、その後同じ匂いがどれかを判断する嗅覚ゲームをしてもらった。ゲーム後に視空間処理力（空間の全体的なイメージを把握する認知能力）を要するテストをした結果、ゲーム前よりテストのスコアが向上していた。

11

- ① ゲームには視空間処理力を向上させる可能性がある。
- ② 嗅覚がよくなると、認知機能を回復できる可能性がある。
- ③ 年齢を経ても嗅覚が正常な人は、認知機能が改善する可能性がある。
- ④ 嗅覚を刺激すると、視空間認知能力もあがる可能性がある。

現代の国語、言語文化

問二 次の問題文を読んで、後の問い(1)～(3)に答えなさい。

北極で冬季に観測された海水の年間最大面積が衛星観測史上最小の1379万平方キロメートルとなった、と国立極地研究所(極地研)と宇宙航空研究開発機構(JAXA)が18日に発表した。北極海周辺の気温が平年より高いことが要因とみられ、今後の気象や海洋環境への影響が懸念されるという。

極地研とJAXAは現在、「北極域研究加速プロジェクト(ArcSII)」の一環として、水循環変動観測衛星「しずく」などのマイクロ波放射計の観測データから北極の海水面積を観測している。海水面積は毎年10月から翌年3月にかけて拡大し、4～9月に縮小する季節変動を繰り返している。

極地研などによると、3月20日に観測した1379万平方キロメートルは、これまで最小だった2017年3月5日の1392万平方キロメートルを13万平方キロメートル下回り、1979年から続いている衛星観測史上最小を記録した。また昨年12月から今年2月にかけての月平均海水面積もいずれの月でも観測史上最小だったという。

また、3月20日の海水縁を2010年代平均と比較すると、グリーンランド東側以外の多くの海域で海水域が小さい傾向があった。特に、海水分布の南限に近いオホーツク海では今年2月の海水の平均面積が過去2番目の小ささだったことが判明した。

こうした観測結果について極地研とJAXAは、昨年12月から今年2月にかけて、北極海周辺気温が平年より高く、海水域が広がりにくい状態が続いたことが冬季の海水面積の記録的減少につながった一因とみている。

南極は巨大な氷床が形づくっているが、北極点は薄く変化しやすい海氷上にある。いくつかの研究データによると、北極は地球平均の3倍以上の速さで温暖化が進んでいるとされる。気候変動に関する政府間パネル(IPCC)は、世界が温室効果ガスの削減対策をしないシナリオでは最悪2050年に北極海の海水がなくなると予測している。

また多くの気象学の専門家は、近年北半球で頻発している熱波や豪雨、干ばつといった「極端気象」も北極の温暖化がもたらす偏西風の蛇行が大きく影響していると指摘している。

二〇二五年四月二五日『サイエンスポータル』より

※問題作成の都合上、文章の一部を改変した

現代の国語、言語文化

(1) 問題文において主旨を展開する前提となっていることを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 12 にマークしなさい。

- ① 温室効果ガスを削減しないかぎり、北極海の海水はなくなる。
- ② 北極の海水面積は、10月から3月までの冬季期間に最大化する。
- ③ 温室効果ガスなどによる温暖化が進行し、地球に影響を与えている。
- ④ 北極の海水面積は、2017年に観測された数値が史上最小だった。

(2) 問題文の結論を導く根拠として正しいものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 13 にマークしなさい。

- ① 極地研とJAXAが、北極の海水面積に関して同様の観測結果を発表している。
- ② 北極で冬季に観測された海水の年間最大面積が、衛星観測史上最小を記録した。
- ③ オホーツク海では今年2月の海水の平均面積が過去2番目の小ささだった。
- ④ 南極には巨大な氷床が存在するが、北極点は薄く変化しやすい海水の上にある。

(3) 問題文の結論として正しいものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 14 にマークしなさい。

- ① 北極の海水面積が最小になると、偏西風が蛇行する現象が生じることになる。
- ② 北極の異変を理解し、各国は温室効果ガスの削減を積極的に行う方向に転換すべきである。
- ③ 北極の温暖化が今後の地球の気象や海洋環境にどのような影響を与えるのか、危惧される。
- ④ 地球平均の3倍以上の速さで温暖化が進んでいるとされる北極は、文明の危機を象徴している。

現代の国語、言語文化

〔三〕次の問題文を読んで、後の問い（問一～問九）に答えなさい。

そもそも、なぜ人は、他者とともに生きるかぎり傷が絶えないのだろうか。なぜ苦悩が繰り返されるのだろうか。懷疑論者によれば、それは、自分の心は知りうるが他者の心は知りえないという、我々の認識能力の限界にユライする。そのために、欺瞞や誤解、無理解が相次いでしまうのだ、というわけである。

しかし、この考えは間違っている。我々は実際に他者の心を知りうるのである。むしろ問題の核心は、我々はときに他者の心を知っているがときに知らないという、その揺らぎ、曖昧さにこそ存在する。

たとえば、私はときに、他者がお腹に痛みを感じていることを知っている。それは、彼がお腹を抑え、悲鳴を上げているからである。実際、そうした見聞きしてすぐにわかる身振りや口振りは、他者が痛みを感じているという判断の証拠となる典型的な規準だと言える。しかし、そのような規準があるがゆえに、人はたとえば、何も痛くないときに悲鳴を上げてみせることによって、痛みを感じている振りをすることもできる。私はその嘘にまんまと騙され、他者の心を見誤ることも少なくない。

また、私はときに、わかりやすい典型的な規準に頼らずに注意深く観察して、相手の目元や口元の変化、あるいは手や指先の仕草などを手掛かりにすることもある。それから、そういった微妙な動きに特に気づいていない場合でも、目を見れば思っていることがわかるとか、長い付き合いだからなんとなく気持ちがかかる、ということもある。しかし、その種の経験則や勘はとても一般化できる規準ではなく、まさに経験やシシツ、相手との関係、そのつどの状況等によって、中身も有効性も相当に変わってくる。X、へこういう表情をしているとき、人はいつもお腹に痛みを感じている」といった一般的な法則性に落とし込むことはできないのである。

いずれにせよ、心的状態の有無や内実を判断する規準には、どうしても不確かさが存在する。肝心なのは、この不確かさは、〈痛い〉をはじめとする心的概念を構成する欠かせない部分だということである。

（中略）

他者が痛みを感じているかどうかの不確かさは、彼が彼であり私が私であるということによるのか。すなわち、いかなるときも自分の心は知りうるが他者の心は知りえない、ということによるのか。こう問うとき、人はあるイメージによって欺かれていたり*ウイトゲンシユタインは指摘する。それは、心をなにか各人の身体内に隠されている実体のようなものとして捉えるイメージである。このイメージの下では、各人の心は本人にしか感知できず、他者の心は原理的に謎となる。つまり、不確かであるどころか、永遠に不可知であることになる。

そうではないのだ。他者の心の不確かさは認識論上の問題ではないし、また、へ心は各人の身体

現代の国語、言語文化

内に存在する」といった存在論（形而上学）上の問題なのでもない。ワイトゲンシュタインが言うのは、それは我々の具体的な生き方の問題、我々がどのようなコミュニケーション（ゲーム）を営んで生活しているのかの問題だ、ということである。そして彼によれば、不確かさが構成的に組み込まれた概念——揺らぐ概念——を用いてコミュニケーションを営むこと、そのようないわば柔らかな道具でプレーすることが、まさに我々のゲームの特徴にほかならない。我々のゲームがそうであるからこそ、他者の心はケースバイケースでときに判明であり、ときに見失われるのである。

この洞察に従うならば、先の問いにはこう答えることができるだろう。人が他者とともに生きることがぎり傷が絶えず、苦悩が繰り返されるのは、我々が日々、揺らぐ概念（柔らかな道具）でゲームをしているからである。この種のゲームを続けるかぎり、その相手は「ときにいわば透明であり、ときに不透明」であり続ける。他者は、その意味で半透明である。

では、なぜ、我々はそんなゲームを続けているのだろうか。今度はそういう問いが浮かんでくるだろう。心的概念は不確かさを抱えており、「まるでバスターでできているかのように働く」。ならば、そんなナンジャクな道具など放り出してしまえばいいではないか。

鳥の群れの生活について考えてみよう。そのなかの一羽がある鳴き声を上げると、別の鳥が近寄ってくる。また、別の一羽が別の鳴き声を上げると、ほかの鳥たちがイツセイに飛び立つ。これらのコミュニケーションに不確かさが入り込む余地はない。鳥たちは互いに透明である、と表現することもできるだろう。

そして、我々人間も、ときに互いに透明である。誰かが頭をしたたかにぶつけて叫ぶ。そのようなとき、我々は何の疑いも差し挟まず、タンテキに慰めることだろう。では、なぜそれだけでは駄目なのだろう。なぜ我々は、不確かさが組み込まれた心的概念を用いてコミュニケーションを営んでいるのだろうか。そのような概念なしでも、いまと同じくらい効率的に活動できるのではないだろうか。この世界のなかで食糧や危険などの手掛かりに向き合い、弁別的行動を洗練させていくことができるのではないだろうか。いやむしろ、効率性や有用性という点では、バスターでできているかのように働く概念などマイナスにしかないのではないだろうか。

ワイトゲンシュタインは揺らぐ概念（柔らかな道具）でプレーするのが我々のゲームだと述べている。また、彼は「そのような揺らぎこそ、我々の生活の重要な一部分である」と強調し、「我々が自分たちの諸々の概念をもつのは、それが有用だからではない」とも述べている。それはなぜだろうか。

しかし、ワイトゲンシュタイン自身はこれ以上語ろうとはしない。実際、なぜ人は揺らぐ概念を用いたコミュニケーションを営んでいるのか、という問いに答えることは、人が生きることの意味を答えるようなもので、もはや哲学が語る範疇ではないのかもしれない。あるいは、生理学や生物学などの多様な見地からこの問いに回答を出すことができるかもしれない。

Y、少なくとも、我々はそうしたコミュニケーション自体を求めている、ということをご

現代の国語、言語文化

ここで強調することはできるだろう。つまり、我々は寂しいのであり、寂しさに耐えられないのである。

たとえば通信装置をもたない小さな宇宙船に乘せられ、宇宙空間に一人放り出されたと想像したとき、私は他の何ものにも代え難いほどの戦慄を覚える。私はその孤絶的状况にとても耐えられず、早晩正気を失ってしまうだろう。

もつとも、その宇宙船のなかに設置された機械は、たとえば擬似的な会話ができるかもしれない。それによって、退屈さであればある程度は紛れるだろう。しかし、私の極限的な寂しさは、解消するどころか、かえって際立ってしまうだろう。特に、その機械について（こう言えばこう答える）という法則性を発見し尽くしてしまえば、退屈ささえ救ってくれなくなる。Z、そういう機械よりも、たとえば一羽の鳥が同乗している方が、寂しさを多少は和らげてくれるだろうし、あるいは蠅はですらそうだろう。私は蠅の気まぐれな仕草に対して重大な関心をもち、注意を払い、そこにかすかな他者の面影を求めらるだろう。

この点に関して際立ってくるのは、我々が日々営んでいるコミュニケーションを、ウイトゲンシュタインがゲームと呼んでいることの重要性である。人間は、一人よりグループで生きるようになってきている。しかし、そのグループは必ずしもチームではない。我々はチームを組んで効率的な共同作業を行っているだけでなく、ゲームをすることによって生きている。我々は、個別の具体的な他者との虚々実々のやりとりを含み、予想できない展開に開かれているような、そうした不確かなゲームを、切実に必要とするのである。言い換えれば、その種の気まぐれなゲームだけが、我々を寂しさから救ってくれるということだ。

古田徹也「半透明な心―他者とともにあることの悲劇、あるいは救いをめぐって―」より

※問題作成の都合上、文章の一部を改変した

* ウイトゲンシュタイン＝オーストリア出身の哲学者（一八八九―一九五二）。

現代の国語、言語文化

問一 二重傍線部(ア)～(オ)と同じ漢字を含むものを、それぞれ次の①～④の中から一つずつ選び、解答記入欄 15 ～ 19 にマークしなさい。

(ア) ユライ

15

- ① 隣町をケイユ_二して帰る
- ② 植物のユシ_二を取る
- ③ インユ_二法を用いる
- ④ 生徒にセツユ_二する

(イ) シシツ

16

- ① ボランテイアのユウシ_二を募る
- ② ガクシ_二保険に入る
- ③ メンバーのシキ_二を高める
- ④ シアン_二に暮れる

(ウ) ナンジャク

17

- ① 彼はチョウナン_二だ
- ② 茶道のシナン_二を受ける
- ③ ヒナン_二訓練を行う
- ④ ジュウナン_二に対応する

(エ) イッセイ

18

- ① ことのセイヒ_二をわきまえる
- ② カクセイ_二の感がある
- ③ 気運をジョウセイ_二する
- ④ 校歌をセイシヨウ_二する

(オ) タンテキ

19

- ① タンネン_二に掃除する
- ② 用意バンタン_二整った
- ③ 新しいタンゲン_二に入る
- ④ 七夕のタンザク_二を作る

現代の国語、言語文化

問二 傍線部 A 「なぜ人は、他者とともに生きるかぎり傷が絶えないのだろうか。なぜ苦惱が繰り返されるのだろうか」とあるが、その理由としてもっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 にマークしなさい。

- ① 人間は実際には他者の心を知りうるのだが、自分が知ったことが本当に正しいか正しくないかを測るわかりやすい規準が存在しないから。
- ② 人間は意味の揺らぐ概念により他者と交流するが、そうした概念で他者と関わる限り、他者は時にはわからない存在ともなってしまうから。
- ③ 人間は他者の身体的感覚は判断できるが、心の中にはどうしても知りえない部分があり、勝手に誤解したりすることが相次いでしまうから。
- ④ 人間は自分のことはよくわかるのだが、他人という存在は謎めいた不確かさを持っており、そうした他人の言動によって翻弄されてしまうから。

問三 傍線部 B 「この考えは間違っている」とあるが、その理由としてもっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 にマークしなさい。

- ① 人は相手を誤解しても仕草などを観察し誤解を解き、相手の本心を知ることが可能だから。
- ② 人は他者の言動や、自分が持っている勘などにより他者の心を知ることが可能だから。
- ③ 一般化はできないが、勘によって付き合ひの長い相手の心を知ることが可能だから。
- ④ 人は自分の経験をもとに、他者の心や痛みを自分のことのように知ることが可能だから。

問四 空欄 に入る語句の組み合わせとしてもっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 にマークしなさい。

- | | | | |
|---|---------|---------|--------|
| ① | X すなわち | Y したがって | Z やはり |
| ② | X かといって | Y だが | Z あるいは |
| ③ | X つまり | Y ただし | Z むしろ |
| ④ | X よって | Y とはいえ | Z なるほど |

現代の国語、言語文化

問五 傍線部C「鳥たちは互いに透明である」とは、どのような意味か。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 23 にマークしなさい。

- ① 鳥も人もグループで生きているが、鳥の行動は人より単純で誤解が生じる余地はないということ。
- ② 鳥は効率性を優先するチームとして、明快なコミュニケーションを行っているということ。
- ③ 鳥は曖昧さのない、単一の意味を表現する一種類の声により確実な伝達を行っているということ。
- ④ 鳥は鳴き声によって、互いが完全に理解しあえるコミュニケーションをしているということ。

問六 傍線部D「効率性や有用性という点では、バターでできているかのように働く概念などマイナスにしかない」とはどのようなことか。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 24 にマークしなさい。

- ① 現実において集団で手際よく一つのことをやり遂げたり、物事をわきまえた行動を身に著けたりするには、曖昧な心的概念など、ない方がよいということ。
- ② お互いを信じあい、心を一つにして素早く危機を乗り越えることが必要な場合に、他人を疑うような心的概念など、あってはならないということ。
- ③ 人々がよどみなく行動し、自分より社会が大事だと考える人間になるには、自分の考えに拘泥する傾向を生み出す心的概念など、無意味だということ。
- ④ スピードが必要な共同作業などでは、他人のわからなさに傷ついて他人との関わりを嫌う弱い心を生じさせる不確かな心的概念など、必要ないということ。

現代の国語、言語文化

問七

傍線部E「揺らぐ概念(柔らかい道具)」でプレーするのが我々のゲームだ」とはどういうことか。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄にマークしなさい。

25

- ① 他人には傷つけられることも多いが、同じ目的を目指し共同作業をする他人がいることで、孤独を癒やされているというのが我々の人生だということ。
- ② 概念を習得するほど、概念理解の足りない他人との関係が厄介に思えるが、その厄介さにより孤独から救われるというのが我々の生だということ。
- ③ 曖昧さを含む心的概念を他者とやりとりすることで生じる予想外の展開などによって、寂しさから救われているというのが我々の日常だということ。
- ④ 一人の寂しさに耐えられないために、一緒にいても何も言わず孤独を感じさせるような人とも関係を保っているというのが我々の生活だということ。

問八

傍線部F「範疇」の類義語としてもっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄にマークしなさい。

26

- ① 典型
- ② 部類
- ③ 次元
- ④ 課題

問九

問題文の内容に合致するものを、次の①～⑥の中から二つ選び、解答記入欄

27

28

にマークしなさい。

- ① 他者の心は身体の奥にある物体だと考える時、人は懐疑論者と同様の考えを抱くことになる。
- ② 人間は複雑な心的概念を持っているので、自分自身の心はわかるものの、他者の心を知ることができない。
- ③ 認識論や存在論という哲学が生の意味を問わなくなった今、その問いは生物学などに委ねられている。
- ④ どんなに予想外な会話ができる機械が出現しても、人間は機械より自分と同じ生き物に関心を抱く。
- ⑤ 我々が他者の心の曖昧さに悩むのは、我々の認識の構造や認識能力とは、無関係なことである。
- ⑥ 人間の経験や勘を一般化した法則を作ることができれば、耐えがたい苦悩のほとんどは消滅する。

現代の国語、言語文化

〔四〕次の問題文を読んで、後の問い（問一～問九）に答えなさい。

子供の時の出来事で、いまになっても私自身に不思議なままのものがあります。私は七歳か八歳でした。家の下の川を、とくに増水していなければどこでも自由に泳ぎ渡れるようになっていたのですから。

裏口から川岸に向かって降り、竹藪たけやぶを通りぬけて川ぞいに登って行くと、村にやって来ていたバスを見るたびに思ったことですが、それを二台タテに重ねた大きさとかたちの、青みがかった岩がありました。

上流から早い瀬をなして来た水流が、この岩にぶつかり、深い淵ふちになります。その淵の、岩に接している部分が、子供たちに怖おそれられていました。水のなかでは岩が船腹(ア)のようにケズられていて、深く潜ると人の身体は吸いつけられるというのでした。その奥には、岩にあたった水流がトンネルを作っていて、引き込まれると出て来ることはできない、とも……

A ところがもうひとつ話があつて、私はそれに引き付けられていたのです。岩のちょうどなかほどの、水面から三十センチほど下にくびれたところがある。上流から岩にそって流れくんだり、くびれのところまで来ると、水が逆流している。そこでくびれの、手のかかる部分につかまって身体を安定させ、それから水に潜ると、岩の裂け目が見えてくる。子供の頭ならそこに差し込むことができ幅で、裂け目の向こうは、水族館の水槽のようになっていた。

そして、どこから光がやって来るのか、そこは明るく、数十尾ものウグイが、水の流れと同じ速度で、川上に向かって泳いでいる……

話を聞いて、私は数十尾のウグイの群れを見たいものだ、と考えました。それから、教室にいても、運動場で遊んでいても、家で本を読んでいたら、頭が熱くなるようで、ほかのことはなにも考えられなくなりました。

そして、夏休みの始まった朝早く——水面はキラキラ光り、川向こうの林は露ぬに濡ぬれて青あおとしていました——年上の子供たちも川に降りて来ない早い時間に、私はヨモギの葉をつぶしたもので水中眼鏡の曇りを取りながら、浅瀬のツルツルした石を踏んで、ひとりその岩まで上って行ったのです。

私は決心していました。子供がその岩の周りで泳ぐのは危険だ、といわれています。日ごろ私は、臆病なほど注意深くふるまう子供でした。それでいて、ひとり考えていて、ある決心をする時、家族や友達から、風変わりなやつだとあきれられることをする性格でもあったのです。たいいてい自分でもなぜそんなことをしたのか、つくづく後悔しました。それでも性格はあらためられず、森のなかで雨にふりこめられ、三日たつて消防団に助けられたりもしました。この場合、発熱もしていて、ひとりでは降りて来られなかったのです。しかし、夜になるまでひとりぼっちで森に入っている、というようなことは、やはり普通ではありませんでした。

現代の国語、言語文化

この朝早く、私はどうしても、くびれの水面下の岩の裂け目に頭をさしこんで、ウグイの群れを見てやろう、と決心していたのです。そして私は、自分がいったん決心してしまうと、身体のなかから勇気がグングン湧いて来て、もう考え方をあらためることはできないのを知っていました。

それでいて、この決心には自分として正しいところがあるのだと、はつきり言葉にして、頭のなかでいってみたり、紙に書きつけてみたりすることができないのを、私はずっと気にかけていました。

(中略)

私は浅瀬からの急流の端の方に乗っかって、あまり強い力では岩にぶつからないように、しかし岩から離れはしないように何度も流れくどりました。そのうち、とうとう岩のくびれのはしにつかまることができたのです。そこには、話に聞いていたとおり、小さい逆流があつて、岩から手を離しても流されることはありませんでした。私は水に頭をシズめては、岩の裂け目を「偵察」しました。戦争中のことで、子供たちは「戦争ごっこ」をやり、敵の陣地を「偵察」する、というように、よくこの軍隊用語を使っていたのです。

それから、私は大きく息を吸い込んで深く潜り、裂け目に頭を入れました。しかも、できるかぎり奥深く。そして私は、話にきいていたとおり、すぐ目の前に、静かに泳いでいる数十尾のウグイを見ました！

ウグイはそろって私のひろげた手よりも長く、すべすべした銀灰色でした。エラ呼吸して、ゆっくり動くウグイの頭のこちら側の、黒い点のような目が、いつせいに私を見ました……

その光景は、いままあざやかに、私の心にきざみつけられています。ところが、私にはそれに自分がどのように反応し、どういうふうに出たかということが、思い出せないのです。いろんな情景がバラバラに浮かんでくるだけです。

あれから、何回となく、よく思い出そうとしました。夢のなかでその光景を見て、ああ、こうだったんだと発見して喜んで、目がさめてから夢にすぎないと失望したこともあります。

そのようにして、後から私が組み立てて行った情景の初めは、ウグイの群れに少しでも近付こうとして、岩の裂け目に頭を突っ込んでいるところです。下半身が水の流れにあおられて、前へ押し出されたようにも思います。

続いて、もっとよく見ようとしたとたん、頭とあごとが、岩にガツキとはさまれました。頭を引こうとしますが、動きません。このままでは溺れ死んでしまうと、私は驚き、恐れています……

ところが、私にはもうひとつの情景が——いわば、心のなかの情景が——忘れられないのです。それこそ、夢に見たような思い出なのですが……

苦しくても、このままじっとしていればいい。そうすると、自分にもエラ呼吸ができるようになって、水のなかで生きて行くことになる。身体も銀灰色になり、黒い点の目をして。

そして、数十尾のウグイの一尾になった自分の目に、男の子が岩の裂け目に引っかかっているの

現代の国語、言語文化

が見える、とも感じていました……

続いてこちらは確かな記憶があります。水の流れて揺れている私の両足を、強い力の手がつかんで、私を裂け目に深く突き入れてから、横にねじり、そして乱暴に引っぱり出したことです。自分の頭から出た血が、煙のように水に立ちのぼるのを見ました。

そして気を失っていた私が、気がつくと、淵からの水が広い瀬になった浅いところに運ばれていました。私の身体は流れのせいで斜めになって、引つかかっています。あお向いているので呼吸はできるのですが、よじれた水中眼鏡が目を圧迫して、青い空がチラリと見えただけでした。

その私の脇から、浅瀬の底のジャリをザツ、ザツと踏んで立ち去って行く足音が、水につかっている側の耳に聞こえました。

これからが、私の経験したことのなかで、なにより不思議なところなのです。私にはいまでも、左耳の上に痕が残っている傷をつけて、岩の裂け目から引きずり出してくれたのが、誰だったかわからないのです。

まだ父が生きていた時のことです。この人であったかも知れません。いつも裏座敷に坐って仕事をしている父が、一息入れようと川の側の縁側に立ち、風景をながめていて、私のおかしなふるまいに気が付いた。それはありえます。しかし、それから川に駆け降りたとして、私の救助には間にあわなかったのじゃないでしょうか？

朝早く、なにか思い立ってひとりで川へ降りて行く私に、どこか普通じゃないものを感じとり、後をつけてきた母親が助けてくれたのかも知れません。母は小柄な人でしたが、手は大きく、なにかの際には、とても敏捷に立ち働く人でした。

それでも、父か母が私を救ってくれていたのであれば、そのことが家庭の話題になったはず。そう皆さんは思われるでしょう。ところが、そうしたことがあったとして、両親には子供の私になにもいわないままであることがありえた、という気もするのです。そういう人たちだった、と私は感じています。

とくに父が、子供じみた冒険のせいで死になつた息子を救わねばならなかったのだとしたら、おそらく私にはなにもいわなかったらう、と思います。

私は実際に死ぬほど苦しい目にあつたのです。そして自分が失敗したことを反省して、しょげこんでいるのです。それに対しては、黙っている——日頃も、あまり子供たちに話しかけない人でした——。それが父親にはふさわしい態度だったように思います。そして二、三年のうちに父が死ぬまで、私はあのことについて質問する勇気がありませんでした。

母親にも、私はなにもたずねませんでした。頭にけがをしていたのですが、そのことも言い出すことができず、富山から来る薬売りが置いて行く薬袋から、塗り薬を取り出して、自分で塗りました。そのために化膿して傷痕が残つたのだったかも知れません。私は心配している妹にも手を出させないで、せつせと薬を塗つたものです。私のせいなのです。

現代の国語、言語文化

そして、私には、母親に正直にいえなかった理由があったのです。私は裂け目の向こうの水のなかにきれいなウグイの群れを見ながら、自分の考えたことを気にかけていました。苦しくてもこのままにしていれば、自分も一尾のウグイになって水のなかで生きて行くことができる。私はそう思ったのでした。

それだけでなく、

——よし、このままдейよう、と決心したのもあったように感じられていたのです。

大江健三郎「数十尾のウグイ」より

※問題作成の都合上、文章の一部を改変した

問一 二重傍線部(ア)～(エ)と同じ漢字を含むものを、それぞれ次の①～④の中から一つずつ選

び、解答記入欄

29

～

32

にマークしなさい。

(ア) ケズられ

29

- ① サ克蘭状態に陥る
- ② 大豆をアツサクする
- ③ 作文のテンサクをする
- ④ しつこくセンサクする

(イ) シズめ

30

- ① チンツウな面持ちだ
- ② 山火事がチンカした
- ③ チンプな表現だ
- ④ チンジユウを探す

(ウ) ジャリ

31

- ① 契約をリコウする
- ② リシを払う
- ③ ジョウリに合わない
- ④ 人心がリハンする

(エ) ナガめ

32

- ① チョウボウが素晴らしい
- ② チョウダイな山脈だ
- ③ スーツをシンチョウする
- ④ ごセイチョウ願います

問二 傍線部A「ところがもうひとつ話があつて、私はそれに引き付けられていたのです」とあるが、この時の「私」の心情についての説明としてもっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 33 にマークしなさい。

- ① 岩の淵に入ったら二度と出てこれないと考えることは多くの子供たちにとってはまさに恐怖であるが、私は、この困難に打ち勝てば他の子供たちより優位に立てる絶好の機会だと思っている。
- ② 激しい水の流れが岩にぶつかってできた淵に潜ることは私にとつてもたしかに恐ろしいことではあるが、そういった恐怖心を振り捨てて、まだ誰も見たことのない場所を発見する冒険をしたいと思っている。
- ③ 川の急流によってできた岩の淵に引き込まれないように離れた場所から見たいと思つている子供たちとは違い、私は、その淵の向こう側に見える世界と行き来する自由を手に入れたと思つている。
- ④ 他の子供たちは、岩と水流がぶつかる場所に生じる深い淵に吸い込まれることへの恐怖におびえているが、私はその淵の先の岩の裂け目に入り込み、その向こう側を見たいという好奇心にあらがえないでいる。

問三 傍線部B「そんなこと」とはどのようなことか。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 34 にマークしなさい。

- ① 夜まで一人で森に入っていること。
- ② 他の人から見れば普通でないこと。
- ③ 臆病者ならできない危険なこと。
- ④ 多くの人の迷惑になるようなこと。

現代の国語、言語文化

問四

傍線部C「私はずっと気にかけていました」とあるが、この言葉に表現されている「私」の心情を表す語句としてもっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄35にマークしなさい。

- ① ためらい
- ② 心細さ
- ③ 恐怖
- ④ 菌痒がゆさ

問五

傍線部D「偵察」という表現についての説明としてもっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄36にマークしなさい。

- ① 危険が多く、思い通りに行かない川の中で目的を達成することが、川との戦いのように思われ、戦争の際に使われる言葉を思わず使っている。
- ② 自分で決めた行動が順調に進み勇気がゲンゲン湧いて来て、まるで敵を負かした兵隊のような高揚した気分になり、軍隊用語をつい口にしていく。
- ③ 目的の場所に行くことは簡単に達成されると思いながらも、冷静に川の中の様子を見ておくべきだと思い、その思いに見合った言葉を用いている。
- ④ 自分が今日しようと決めた行為が順調に運び、危険なことが起こるなどとは思わず、普段使っていたその場の状況にあった言葉を使っている。

問六 傍線部E「私には、母親に正直にいえなかった理由があった」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 37 にマークしなさい。

- ① このまま水中にいようと思ったと母に言うのは、子供を気にかけてくれない父母のいる家にいたくないと告げることもなるから。
- ② 水中にいつづけ、ウグイとなって生きていこうと決心したことは、人間でなくなつて、今の家から離れても良いと考えたことになるから。
- ③ 助けに来て必死に息子を救った母に、苦しいからこのまま死のうと考えたと打ち明けることは、母の行為を否定することになるから。
- ④ 水の中で生きていけるなどと考えたことを打ち明ければ、また母に普通ではない風変わりな子だとあきれられることになるから。

問七 問題文の内容に合致するものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 38 にマークしなさい。

- ① 「私」は周囲の人間たちから変わり者だと思われることを自覚するようになって以来、なるべく一人で行動するようになっていった。
- ② 「私」は注意深い子供ではあったが、ひとたび何かをしようと決意すると、その決意にしたがつて、つい無鉄砲なことをすることもあった。
- ③ 「私」は、けがをしても自業自得だから誰の助けも借りてはならないと思う自分に厳しい面があり、それゆえ誰にも事情を話さなかった。
- ④ 「私」は、息子がしたいと思うことは危険であろうと自由にさせ、口を出さずに見守ろうとする放任主義的な両親のもとで育てられた。

現代の国語、言語文化

問八 問題文の表現についての説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑥の中から二つ選び、

解答記入欄 39 ・ 40 にマークしなさい。

- ① 「くびれ」や「決心」などには傍点が付けられ、それらが「私」を取り巻く状況や「私」の心理を印象づける役割をしている。
- ② 幻想の中の不思議な逸話であるが、勢いよく泳ぐウグイの様子が事細かく描かれ、現実味を感じさせる文章になっている。
- ③ 「――」を使い補足的な説明をしたり、「……」を多用したりすることで、行間や文章に奥行きを持たせている。
- ④ 幼い頃の出来事を回想して描いている文章だが、筆者の記憶が鮮明なことによって、現在のことのように思える迫真性がある。
- ⑤ 「私」を助け無言で去って行く人物の「ザッ、ザッ」という「足音」が、「私」と父母との摩擦を予感させるものになっている。
- ⑥ 「岩にガッキとはさまれました」や「血が、煙のように水に立ちのぼる」など、水中での危ない場面がリアルに描かれている。

問九 筆者の大江健三郎の作品を、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 41 にマークしなさい。

- ① 金閣寺
- ② 真理先生
- ③ 飼育
- ④ 野火